

教化センター通信 ダルマアピール

発行
真宗大谷派三条教区
教化センター
三条市本町2-1-57

「キーパーソン曇鸞」その二

教化センター主幹 里村専精

曇鸞はその回心を通して漢民族の分別圏を抜け出します。その極まりが他力の理解です。「五つには、ただこれ自力にして他力のたもつなし」（論註）とありますが、現在の中国仏教でも他力の理解が極めて貧弱です。

「ほぼ五三を言いて…」という書き出しで、曇鸞は五つの中国仏教の問題提起をしています。外道・声聞・無顧の悪人・顛倒の善果の四つも数えられていますが、これらに現在にも残っている中国仏教の欠陥が窺えます。

思えば法然が直面した日本仏教が、この五つの諸問題に該当しているように見えます。なかならず自力しか見えないで、他力の理解がないということは今日でも続く問題です。

曇鸞が言う他力は、努力する有名無名の自力の人間全体をそのままに包む他力です。雄大な仏道であり、仏教の根源が語られる大行なのです。曇鸞は、龍樹の易行道と天親の一心にこの雄大な仏道を見ました。総て彼の全存在を挙げた回心に漲ってきたものです。中国人曇鸞を、世界人曇鸞にしたのは菩提流支ですが…。



曇鸞が言う他力は、努力する有名無名の自力の人間全体をそのままに包む他力です。雄大な仏道であり、仏教の根源が語られる大行なのです。曇鸞は、龍樹の易行道と天親の一心にこの雄大な仏道を見ました。総て彼の全存在を挙げた回心に漲ってきたものです。中国人曇鸞を、世界人曇鸞にしたのは菩提流支ですが…。

中国人の枠で考える仏教ではなくて、仏教の原理から語る仏道が曇鸞の他力というこぼれでした。

自力他力という言葉は、日常語では人間的なさして抑揚のない言葉です。が、天親菩薩の「入出二門」を曇鸞が「往還二回向」と見ているのを、親鸞は「往還回向由他力」と言い切ります。曇鸞からのみ、他力真実の仏道が見えてくるというのです。

この時の他力は、自力の一切を大きく包み込むものなのです。つまり仏教の本質を初めて突き止めた、実に痛烈な言葉だったのです。

こういう曇鸞を受け止めた人は、玄中寺の道綽と善導しかいないのです。曇鸞は七祖のキーパーソンであると同時に、中国仏教を含めて世界の仏教のキーパーソンだと言わなければなりません。

親鸞というひとは、こういう曇鸞と天親に基づいた名前を名乗ります。そして法然が語っていた本来の他力の仏道を、鮮明にし続けた生涯を生きたのでした。総ての仏教を貫いて、本願他力の仏道は人間に呼びかけています。

曇鸞に先行する龍樹と天親の二人も、他力という言葉から見るなら、我々と等しい凡夫往生を遂げていった人とみることでできます。いわば、私たちの一番前を歩いている念仏者だと言いうことが出来るのではないのでしょうか。

曇鸞という人の存在意義は、計り知れないものというべきです。

初の感情が今、自分の中に満ちている。自我は乱れ、心安らぐ事は無い。恐れと焦りに苛まれている。まるで覚める事の無い悪夢を見ているかのようだ。

その時自分は、第十九組同朋総会の集いに出席していた。一瞬眩暈かと思つたが、部屋の備品が揺れている。周りの人々もざわめきだしたので見てようやく地震だと気が付いた。

今まで経験したことが無いほどの、長く大きな揺れにやや気分が悪くなるも、その場では誰も怪我する事無く揺れは治まった。暫くして総会は再開され、無事終わった。この時この地震は、驚きはしたものの自分にとってまだ「日常」の範疇に入っていた。帰って地震報道を見るまでは、「まるで映画のようだ」

津波に飲まれる町の映像を見た時、誰かがそう言った。不謹慎だと注意する事は出来なかった。自分もそう思ってしまったのだから。

映画や小説といった創作物では、人が死に、町が崩壊し、国が滅びといった悲劇は珍しくない。「変化の

「平穏な日常という至福」

第十九組 善精寺 桑原 俊裕

無い退屈な日常」から離れた「刺激的な非日常」として。娯楽として「有り得ない非日常」である破滅や終末を、余裕を持って楽しめる。一時的に不安や恐怖を感じようと、その一時が過ぎ去れば、また平穏な「日常」に帰ってゆける。

平穏こそが「日常」であると疑わなかった自分は、現実にかけている悲劇を目にして、これは現実には在ってはならない光景であると感じ…。だが、津波の映像は映画のワンシーンなどでは無い。

その後次々と報道されるニュースは、何れも自分の「日常」に在ってはならないものばかりだった。原発のトラブルによる放射能漏れのニュースなど、最早ハリウッド映画の設定としか聞こえず、それが自らを取り巻く現実だとは思えない。変わり栄えのしない平穏な毎日。今の日本で、これを「退屈な」などと感じる者がどれほどいるだろうか。在って当然と思ひ、感謝の心を忘れ、平穏な日々を「退屈」と感じた事のあるこの身は、今まで何を見て生きてきたのだろうか。

「真宗寺院の消長」

第十一組 願興寺 中島義紘

東日本大震災に罹災された皆さんに心よりのお見舞いと、亡くなられた皆さまに哀悼の意を表します。大谷派寺院やご門徒のみなさんの被害も多く、中越地震、中越沖地震の被害を蒙った私たちは、他人事でないたたみを感じています。被災地の一日も早い復興のために、私たちも微力を尽くしたいと思えます。

さて、近代における真宗寺院の減少は著しいものがあります。明治初年、神道国教化を企図する明治政府が行った「廃仏毀釈」政策に、県内の寺院は翻弄されました。佐渡での徹底ぶりは激しく、多くの寺院が廃寺に追い込まれたまま、復興できない寺院もありました。

県立文書館に、時の新潟県令（知事）が、明治十六年時点での寺院や神社の概要を報告させた「寺社明細帳」が残されています。寺号、所在地、本尊、創立年次、境内地面積、住職名、檀信徒数などについて、寺院や神社はいうに及ばず、仏堂小祠に至るまでほぼ悉皆的に報告されたものです。寺地移転や廃寺の加筆は戦後まで続いていて、昭和三十年代半ばまで、県の公簿として用いられていたようです。

この史料を見ると、いろいろと興味深いことに気づきます。

たとえば、真宗寺院と他宗の寺院との報告量の圧倒的な違い。真宗寺院（各派を問

わず）は一から二紙、多くても数紙で終わりますが、他宗の場合（時宗・浄土宗も含めて）、数紙から数十紙に及びます。所有する田畑の書き上げ部分が多数を占めるためです。多数の田畑を小作に出す地主として檀信徒に「君臨」していた他宗寺院と異なり、真宗寺院はほとんど田畑を所有することがありませんでした。寺の存続維持は門徒によって支えられてきたからでしょう。そしてこのことは、真宗寺院の成立段階から現在に至るまでの変わらぬ姿といってい

いでしょう。

ところが、この明細帳に記される寺院の約二割近くが現在廃寺になっています。その多くは、大坊の境内地あるいは近接地にあった「前寺」だったようです。真宗寺院は、明治九年に、ごくわずかな例外を除いてすべて本山末になりました。従って、大坊の下にあつて、法務を手伝っていたかつての「前寺」も、明治九年の段階ですべて独立寺院になったのです。しかし、独立したことになつてはいませんが、寺院を護持していくための門信徒が皆無か僅少であるため、経済的にはかつての本坊に頼らざるを得なかったのです。本坊との関係がよい時はいいのですが、それでも「隷属」的な地位に甘んずるしかなく、名実ともに「独立」を意図した段階で厳しい状況に陥つたであろうことは想像に難くありません。本坊を離れて他の地域に出ていった寺院は名実ともに独立することはできたものの、それ以外の道としては、従前通りの地位に近い処遇に甘んずるか、廃寺の道しかなかったのでしょう。

かつて自坊の「前寺」から出た本山勧学が、本坊の継嗣である自分にへりくだった対応であつたのはきわめて感心なことであつたが、その「勧学」の甥にあたる現任職が本坊からの独立を企図しているのはきわめて不愉快なことに、「寺史」に記した例に出会つたことがあります。時代が進んで、さすがにこんな例は払拭されたと思います。しかし、無意識的にでもそんな対応がかいま見られるとしたら、それは、自らを凡愚とし、私ども群萌を御同行御同朋と、かきずいて下さつた宗祖のお心に背くことにな

るのではないのか、と厳しく問い返す必要があるのではないのでしょうか。



「今思うこと」

第十八組 満行寺 島津崇之

（第一期生）

門徒のお寺離れが進んでいると言われる。仏教が衰退していると言われている。僧侶は葬式のみを追われ、現実社会に何も貢献していない。かたや他の宗教は一生懸命現実社会に役立とうとしている。仏教も同じくそうすべきだ。と言われる。釈尊は苦悩する衆生を救い続けたではないか。たしかに衆生救済は仏教の命題だ。しかし、一番

救われなければならないのは誰であろうか。如来が真つ先に救わんと願われているのは誰であろうか。苦悩する衆生とは、わたしではないか。わたしが仏になること以外に釈尊の出世本懐はないと思う。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。（三帰依文）

蓮如上人は、当時戦乱や飢饉等で荒廃した世状において、他宗の人たちが人命救済に奔走する中、御文等で念仏を勧められていたという。念仏を勧められている対象は、広く世間一般ではなく、わたしであろう。二千五百年前の釈尊が、七百五十年前の親鸞が、五百年前の蓮如が、わたしに念仏を勧められるのであると思う。仏道は内観の道である。客観的道理では言い尽くせない道である。客観的理性ではまにあわない道である。あくまでも主観的道理の道である。如来とわたしとの対話の道である。信誦ともに因とする道である。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめし。たちける本願のかたじけなさよ

（歎異抄）

もし本当に仏教の衰退を憂いているのなら、今こそ、真摯にお法りと向きあうべきである。